



Title	十二世紀後半における西夏と南宋の通交
Author(s)	佐藤, 貴保
Citation	待兼山論叢. 史学篇. 2004, 38, p. 1-24
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/48069
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

十二世紀後半における西夏と南宋の通交

佐藤貴保

はじめに

十一世紀から十二世紀前半にかけての中国では、いわゆる燕雲十六州から北方を勢力下に置いた遼（契丹）、その南を支配する北宋、そして西北方の陝西北部から河西・寧夏地方を支配した西夏の三国が鼎立していた。陝西北部・隴西地方で北宋と境を接していた西夏は、遼の後援を受けて、北宋と断続的に抗争を繰り返した。西夏の侵攻に悩まされた北宋は、西夏に多額の歳賜を支払って講和を結んだ。一方、平時には、西夏は遼・北宋へ朝貢使節を派遣するとともに、国境付近での貿易を盛んに行い、経済面でも密接な関係を結んでいた。

十二世紀前半に東北方の女真族が建国した金朝は遼・北宋を滅ぼして華北へ進出した。以後、中国では十三世紀初頭にモンゴル帝国が南進するまで、華北の金朝と北宋の残存勢力が華南に建てた南宋の二つの王朝が対峙することになる。この間、西夏は領土を拡張して独立を保ったが、陝西・隴西地方に金朝が進出したことで、南宋とは境を接しなくなり、南宋への朝貢使節の派遣は行わなかった。一方、西夏は境を接する金朝には臣礼をとって朝貢関

係を結び、十三世紀に入るまで概ね平和な関係を保ったとされる⁽¹⁾。

しかしながら、西夏と金朝との関係が安定していたとされる十二世紀後半において、西夏と南宋との間では不定期ながら密かに使者が往来していたとする指摘が先行研究によってなされている。ただ、いずれの研究も概説的なものにとどまっており、年代比定や背景分析は不十分なままにされている⁽²⁾。十二世紀前半までの中国は北宋・遼・西夏の三国が牽制し合う時代であったが、十二世紀後半における西夏と南宋の通交はどのような背景で行われたのか、兩國の通交が南宋と金朝との関係、そして西夏と金朝との関係にどのような影響を及ぼしたのかは、未だ充分には検討されていない。

十二世紀後半における西夏と南宋の通交は、断続的に三期にわたって行われていたようである。本稿では各期の通交に関する諸文献の記述を整理・確認するとともに、通交の背景とそれがもたらした影響を考察していきたい。ただし、西夏側の文献には外交に関する史料が皆無であるため、南宋や金朝側の文献を博搜し、検討を進めていく。

一 海陵王の南宋遠征と西夏・南宋の接触（第一期・一一六一―一一六三年）

正隆六（南宋・紹興三十一、西暦・一一六一）年八月、金朝の海陵王は南宋平定の兵を挙げた。金軍本隊は十月には揚州に達したが、この間に金朝ではクーデターによって完顔雍（烏祿）が帝位に即き（世宗）、海陵王は十一月に家臣によって殺害された。そのころ、隴西地方では四川宣撫使吳璘の率いる南宋軍が金朝領内に侵入し、この年九月には秦州を占領、西夏との国境に近い蘭州では金軍が反乱を起こして南宋軍に投降するなど、この地方における戦局は南宋側に有利に展開した⁽³⁾。この年十月、南宋は西夏に対して金朝への抗戦を呼び掛ける檄文を発して

いる⁽⁴⁾。兩國の接触はこうして始められたのである。

南宋の檄文に対して、西夏は同年十二月に返書を送り、南宋の対金抗戦を支持している。⁽⁵⁾では、西夏側は実際にはどのような行動をとったのであろうか。『金史』卷一三四・西夏伝によると、「夏（西夏）も亦た隙に乗じて邊羌・通峽・九羊・會川等の城寨を攻取し、宋も亦た夏境に侵入す」（中華書局本、二八六八頁）と、西夏軍は南宋軍の北上に呼応し、金朝領内に侵攻していたことが確認される。南宋・西夏兩軍に南北から攻撃を受けたことにより、金朝の勢力は翌大定二（南宋・紹興三十二、西曆・一一六二）年春までに隴西地方からほぼ一掃されるに至った。

この結果、西夏・南宋の兩勢力は再び隣り合うことになったのであるが、前掲の『金史』西夏伝によると、その後南宋軍は西夏領に侵入したという。兩國の協調関係は長くは続かなかつたのである。先行研究では侵入した場所や時期は明らかにされていがないが、『建炎以来繫年要録』卷一九九・紹興三十二年三月戊午（二十二日）の条には、南宋軍の忠義軍統制兼知蘭州の王宏が「兵を引きて會州を抜」いたとある（文海出版社本、六五七六頁）。南宋軍が攻略した會州は黄河右岸（南岸）に位置し、かつては北宋領であった。北宋滅亡後、會州は金朝領となつたが、『金史』卷二六・地理志下・慶原路の条によると、金朝は皇統六（西曆・一一四六）年に「德威城・西安州・定邊軍等の沿邊の地」を西夏に割譲したとある（中華書局本、六五三頁）。德威城もまた黄河の右岸に位置し、會州の西に隣接する。⁽⁶⁾會州と德威城の兩者の位置関係に鑑みれば、德威城と同時に同じ黄河右岸に隣接する會州もまた西夏へ割譲されたと考えるのが自然である。南宋軍が攻略した會州は、実は西夏領であつた可能性が高いのである。

南宋軍の侵攻を受けた西夏側はどう対応したのであろうか。『建炎以来繫年要録』卷一九九・紹興三十二年五月乙卯（十九日）の条には、「夏人百餘騎もて秃頭嶺を寇して牛馬を掠し、又た五十騎を以て鎮戎の最高嶺に駐し、軍民

凡 例

- 12世紀前半の北宋・西夏国境
 12世紀後半の南宋・金・西夏国境

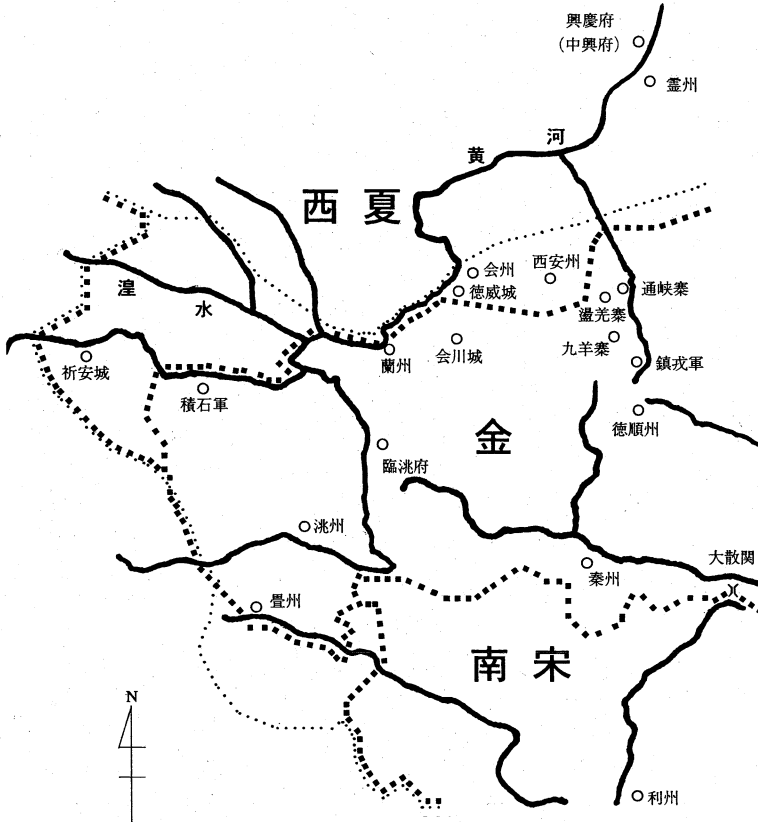


図 隴西地方形勢図 (地名は海陵王の南宋遠征当時のもの)

を射傷す」(文海出版社本、六六一四頁)とあり、西夏軍が鎮戎軍付近にいる南宋軍を攻撃している。またこれより先、『金史』巻六・世宗本紀上・大定二年四月乙亥(十九日)の条には、「夏國使を遣わし來たらしめて即位を賀し、及び方物を進し、及び萬春節を賀す」(中華書局本、一二七頁)とあり、西夏は金朝への朝貢を行なっている。西夏は金朝との友好關係を修復するとともに、南宋への對抗姿勢を明確にしたのである。さらに『金史』西夏伝には、「世宗即位するに、夏人復た城寨を以て來歸し、且つ兵もて宋の侵地を復さんことを乞う」とあり、西夏側は占拠していた金朝領の城寨を返還し、南宋軍の掃討を求めている。西夏・金朝兩軍の南宋軍に対する反撃はこの年の内に行われたらしく、『建炎以來朝野雜記』乙集卷一九・西夏扣關の条には、

吳璘宣撫使と爲り、進みて三路(秦鳳・熙河・涇原路)隴西地方)を取り、間を遣わして之(西夏)と結ばんとし、凡そ六七たび往かしむるも報じず、已にして金人と合して我が會州を奪う。紹興三十二年(中華書局本、八四六頁)

とあり、西夏は南宋からの数度にわたる遣使に応えず、金朝と連合して會州を奪回している。

この年十二月、參知政事史浩の獻策を受けた南宋皇帝は、隴西方面の南宋軍に退却命令を發し、南宋軍は翌年正月に隴西地方から撤退した。宋臣王十朋は、この時史浩が「妄りて虜(金朝)と西夏と協力して(吳)璘を攻めんとす」と説いて南宋朝廷に撤退を働きかけたとして、後に彼を批判している。史浩の獻策は、南宋側にとって金軍のみならず、西夏軍の動きもまた脅威であったことをうかがわせる。王十朋は史浩の發言を妄言としているが、上述の通り西夏が金朝との關係修復に動き、南宋軍を攻撃していたことは事実である。

第一期における西夏と南宋との接触は、華南へ南下せんとする金軍を牽制する目的で南宋側から積極的に進められた。西夏側は南宋軍の北上とともに金朝領内に侵入し、金朝の勢力は一時的に隴西地方から後退するに至った。しかしながら、南宋軍が西夏領に侵入したため、西夏側は金朝との関係を修復して南宋に対抗した。その結果、南宋軍は西夏・金朝兩軍の反撃にさらされ、ついには隴西地方から撤退するに至った。西夏軍の動向は、宋金戦争の隴西方面における戦局を大きく左右していたと言つてよいだろう。

二 西夏の任得敬と南宋の通航（第二期・一一六〇年代後半～一一七〇年）

西夏と南宋との通航が再び文献に現れるのは、一一六〇年代後半である。『宋史』卷四八六・夏国伝下には、

乾道三年五月、夏國の相任得敬スバイ間使を遣わして四川宣撫司に至らしめ、共に西蕃を攻むるを約し、虞允文報ずるに蠟書を以てす。七月、得敬の間使、再び宣撫司に至るも、夏人其の帛書を獲て、金人に傳至す。（中華書局本、一四〇二六頁）

とある。西夏の宰相任得敬が、南宋の四川宣撫使虞允文のもとへ密使を派遣して「西蕃」を共同で攻撃することを約したものの、二度目の接触では、南宋側が送つた密書が金朝側の手に渡つたとする。

『宋史』夏国伝は、一連の密使の派遣を乾道三（金・大定七、西曆・一一六七）年の出来事としている。これに対し、『宋史』卷三四・孝宗本紀二では、乾道四年五月の条に「是月、西夏の任敬徳マ使を遣わして四川宣撫司に至らしめ、兵を發して西蕃を攻むるを約す」（中華書局本、六四三頁）、同年七月の条に「是月、西夏間使を遣わし來

「たらしむ」(同、六四三頁)とあり、夏国伝の記述よりもちよつと一年遅れて記録されている。孝宗本紀の記述は夏国伝とほぼ同じ内容であるから、『宋史』の記述に混乱があると見るべきであらう。先行研究では、記述の混乱については未だ議論されていない。そこでまず、密使派遣の年代を確定してみたい。

『建炎以来朝野雜記』乙集卷一九・西夏扣關の条では、密使派遣を次のようにまとめている。

虞丞相(允文)蜀(四川)を撫するに、權臣任德敬と約を結ぶこと甚だ密なり。王公明(炎)再び使用するに、遂に蠟書を以て德敬に遣り、約するに夾攻を以てす。會ま德敬誅に伏し、羌(西夏)人得て之を上す。范致能(成大)疆を出づるに、虜(金朝)人因りて以て我(南宋)を責む。乾道六年(中華書局本、八四六―八四七頁)

冒頭の「虞丞相蜀を撫する」とは、『宋史』夏国伝が伝える初回「五月」の接触で蠟書を送った虞允文が、四川宣撫使の職にあつたことを示唆している。虞允文が四川宣撫使の職にあつたのは、乾道三年六月から乾道五年三月の間であり、その後は王炎が就任している。⁽⁹⁾とすると、虞允文が四川宣撫使として「五月」に蠟書を送ることができるのは乾道四年以外にあり得ない。初回「五月」の密使派遣は、『宋史』孝宗本紀の伝える乾道四年五月が正しいこととなる。『宋史』孝宗本紀の記述に従えば、二回目「七月」の密使派遣も同じ乾道四年に行なわれたと見ることはできる。

しかし『宋史』夏国伝の「七月」の記事は孝宗本紀と異なり、南宋側が送った密書を西夏側が取り上げて金朝に提出したとある。前掲『建炎以来朝野雜記』の記述によると、乾道六(金・大定十、西曆・一一七〇)年に南宋か

ら金朝に派遣された范成大は、王炎が任得敬へ送った密書に関して金朝側から詰問されたとしている。范成大が金朝に入朝したのは、乾道六年九月のことである。⁽¹⁰⁾ 周必大撰『周益国文忠公集』(以下『文忠集』と略す)所収の范成大の神道碑の文章には入朝の時の出来事が記されているが、その中に、

後數日して朝辭するに、金主(世宗)其の臣をして傳諭せしめて云えらく「盟好已に固むるも、汝の國乃ち帛書を以て密かに夏國の任徳敬と結納するは、此れ何の理なるか」と。公(范成大)答うらく「以うに界外の奸細僞りて之を爲れり」と。俄かに館伴蜀中の蠟書を持ちて來たり、印文を指して公に示す。公曰く「御寶すら僞るべし。況や印をや」と。⁽¹¹⁾

とあり、范成大が四川から任得敬へ送られた密書について、金朝側から詰問を受けていたことが確認できる。よつて王炎の密書が乾道六年九月の時点で金朝側に渡っていたことはこれで間違いない。また『金史』交聘表ではこの年の七月庚子(二十二日)⁽¹²⁾に、同書西夏伝では同年八月に、西夏がこの密書を密使とともに金朝側へ引き渡したとする。⁽¹³⁾ いずれにせよ范成大が金朝に入朝する直前に密書が西夏から金朝に渡っていた点では、南宋側・金朝側の記述は一致している。そして密使とともに金朝へ引き渡されたことを勘案すると、王炎による密書の発信、西夏側の捕捉、そして金朝への引き渡しという一連の事件は、さほど時間をおかずに起きていたはずである。よつて王炎の密書は乾道六年七月ごろに作成され、任得敬の密使はそのさらに直前に四川へ送られたものと考えるべきである。ここまで、密使派遣の年代を確定してきたが、第二期の接触は第一期とは逆に西夏側が積極的に行なっている。そして西夏側の密使は、西夏皇帝ではなく任得敬が派遣していたようである。任得敬は当時、西夏の宰相として権

勢を振るっていたとされている。⁽¹⁴⁾ここからは、密使派遣の背景を考察していきたい。『宋史』の記述によれば、任得敬が当初密使を派遣した目的は、「西蕃(番)」を挾撃することにあつたという。「西蕃」とは、南宋の西方、現在の青海省南部から甘肅省南部にかけての山岳地帯(以下便宜上、この地域を「青海南部」と呼ぶ)のチベット系諸部族を指すものとみられる。

では、当時の青海南部の情勢はどうであつたか。それを知るうえで手がかりとなるのが、『金史』巻九一・移刺成伝(中華書局本、二〇一六―二〇一八頁)の記述である。その記述を要約すると、大定六(南宋・乾道二)年、旧積石軍(析安城)付近で西夏に反抗していた莊浪四族(吹折・密臧・隴逋・彪拜)を西夏軍が攻撃し、そのうちの隴逋・彪拜の二族は隣接する喬家族のもとに逃亡した。喬家族は当時、木波四族(喬家・丙離・隴逋・彪拜)長の結什角を首領と仰いでいた。莊浪四族の隴逋・彪拜の二族と木波四族の隴逋・彪拜の二族は同一の部族とみられる。木波四族の勢力範囲は、「北は洮州・積石軍に接し」「東南は疊州羌に接す」とあり、青海南部の西夏・金朝・南宋三国国境をまたぐ地域にあたる。結什角率いる木波四族は大定四年以降に金朝に服属したらしい。西夏は金朝に使者を派遣して喬家族のもとに逃亡した隴逋・彪拜の二族を討伐するよう求めたが、金朝側は「隴逋・彪拜二門の舊夏國に屬すを知らず」、これを拒否した。その後大定九年に、結什角は西夏領内にいるところを西夏軍に発見され、殺害された。この時金朝の辺臣は朝廷に、

夏國王李仁孝、其の臣任得敬と其の國を中分し、兵四萬、役夫三萬を發して、析安城を築き、喬家族の首領結什角を殺す。屢ば宋の諜人を獲うるに言えらく、宋夏國と結びて邊境を犯すことを謀らんと欲す、と。

析安は本積石の舊城にして、久しく廢し、邊臣の戍兵を設けて莊浪族を鎮撫せんことを請い、盜に備うる所以にして、他有るに非ざるなり。結什角兵を以て境に入れば、是を以て之を殺すも、喬家族の首領たるを知らざるなり。

と、結什角が西夏領に侵入したために殺害したと回答している。金朝側は大理卿李昌図らを派遣して現地の実情を調査した結果、結什角が西夏領内で殺害されたことを確認し、西夏と南宋の通交を監視するため「熙秦（隴西地方）の宋夏に迫近せる衝要に於いて戍兵を量添」し、国境警備の強化を図った。

『金史』移刺成伝の記述と、任得敬が最初に南宋へ密使を派遣した時期—乾道四（金・大定八）年五月とを重ね合わせると、莊浪四族の一部が金朝領内へ逃亡した事件の二年後に密使が派遣され、そのさらに一年後に結什角が殺害されたことになる。任得敬は西夏・金朝・南宋の国境地帯にあたる青海南部のチベット系諸部族対策のため、四年にわたり金朝との交渉を繰り返し、対金交渉が行き詰まると南宋との交渉を開始していたと見ることができ、さらに前掲の金朝辺臣の報告によれば、西夏と南宋の通交は結什角が殺害された大定九年にも行われていたようである。任得敬が南宋と挟撃しようとしていた「西蕃」とは、木波四族をはじめとする青海南部のチベット系諸部族を指していたのであろう。

それでは、任得敬はなぜ青海南部のチベット系諸部族の攻撃に関心を持っていたのであろうか。その理由は単に反乱を鎮圧するためだけではなく、もう一つ別な目的があったようである。それは前掲『金史』移刺成伝の金朝辺

臣の報告にもあるように、任得敬自身の西夏からの分離独立への動きと関連があるのではないかと筆者は考える。任得敬は大定八（南宋・乾道四）年四月に、任得聰を派遣して金朝皇帝世宗に自らの上表文と朝貢品を送ったものの、世宗は「得敬自ら定分有り、附表禮物皆な受くべからず」と、受け取りを拒否している。⁽¹⁵⁾ 任得敬が最初に南宋へ密使を送ったのは、前述の通りこの年の五月であるから、金朝へ入朝したまさに直後にあたる。さらに『金史』交聘表・大定十年の条には、

（三月）丁丑（二十六日）、詔して夏の奏告使を以て閏五月十六（日）に行在に就かしむ。閏五月乙未（十六日）、夏の權臣任得敬、其の國を中分せんとして、其の主李仁孝を脅し、左樞密使浪訛進忠・參知政事楊彦敬・押進翰林學士焦景顔等を遣わして上表せしめ、得敬が爲に封を求むるも、詔して許さず、使を遣わして詳問せしむ。

（中華書局本、一四二七頁）

とあり、任得敬が西夏を二分割し、自らの独立を金朝に認めさせようとしたものの、世宗は任得敬の要求を再度拒絶したのである。先の考察により、任得敬が王炎へ密使を送ったのはこの年の七月あるいはその直前とみられるから、南宋への密使はいずれも金朝が任得敬の自立を認めなかった直後に派遣されていることがわかる。

任得敬はなぜ二度にわたって金朝に使者を送り、西夏からの自立の承認を求めたのか。筆者は彼のねらいが単に外国からの支持の取り付けだけにはとどまらず、金朝へ独自に朝貢使節を派遣することによる経済的な利益の獲得という側面もあったのではないかと考える。西域と中原を結ぶ東西交通路の要地を掌握し、中継貿易の利を享受している西夏にとって、金朝への朝貢使節の派遣は、回賜品を獲得し、かつ朝貢使節が途上で行う商業活動によって

大きな経済的な利益を挙げる機会でもあった。⁽¹⁶⁾ 朝貢に伴って得られる利益は西夏のみならず、自立を目指す任得敬にとつても、政権を経済面で維持するうえで重要なものとなるはずである。『金史』西夏伝によると、任得敬が西夏皇帝から分与を受ける地域は「西南路及び靈州・囉龐嶺の地」(中華書局本、二八六九頁)とある。「西南路」や「囉龐嶺」の正確な位置はわからないが、祈安城を含む湟水・黃河南岸、すなわち西夏領東部の金朝と境を接する地域にあたるとみられる。『金史』巻五〇・食貨志五・榷場の条によると、金朝は当時、蘭州などの西夏との国境付近に榷場(貿易場)を置いていた(中華書局本、一一一四頁)。金朝と境を接する地帯の分与を受けることになる任得敬にとつて、金朝からの支持は榷場貿易を維持するためにも欠かせなかつたはずである。任得敬による二度にわたる金朝への入貢に、貿易による経済的な利益の確保のねらいがあつた可能性は充分にあるだろう。故に金朝から自立を認められなかつたことは、任得敬にとつて経済的にも大きな痛手であつたに違いない。南宋との通交がいずれも対金交渉の失敗直後に実行されているのは、金朝から自立を認められなかつた任得敬が貿易を含めた新たな外交関係を南宋と結ぼうと考えたからではなからうか。

木波四族をはじめとする青海南部のチベット系諸部族は、西夏・金朝・南宋の三国国境地帯に居住しており、彼らの勢力範囲を通過すれば、金朝領を経由せずに西夏と南宋とを往来することができる。時代は遡るが、南北朝時代には、青海地方に勢力を有していた吐谷渾は、⁽¹⁷⁾ 南朝に遣使して北朝を牽制しており、その際青海南部は吐谷渾と南朝領の四川地方とを結ぶ交通路となつていた。北宋時代には四川―青海間で茶馬貿易が盛んに行われ、⁽¹⁸⁾ 十二世紀中葉の金朝は、木波四族の勢力範囲に接する洮州に南宋向けの榷場を置いている。十二世紀後半に入つても、四川―青海南部間の交通路が使われていたことは充分に考えられるだろう。

その交通路上に居住しているチベット系諸部族は、『金史』移刺成伝にもあるように、西夏に対し服属と背反とを繰り返していたわけであるが、大定年間初期に金朝で臨洮尹に任ぜられていた張中彦の伝記に、

西羌吹折・密臧・隴逋・彪拜の四族、險を恃みて服さず、(中略)中彦曰く「此の羌、服叛常ならず、若し中彦自行するに非ざれば、勢必ず不可なり」と。即ち積石の達南寺に至るに、會長四人來たり、之と降るを約し、事遂に定まれば、賞もて之を遣わす。(『金史』卷七九・張中彦伝。中華書局本、一七九〇頁)

とあり、西夏に反抗したとされる吹折・密臧・隴逋・彪拜の莊浪四族は、金朝に対しても服属と背反とを繰り返していたのである。そして前掲の『金史』移刺成伝に「析安は本積石の舊城にして、久しく廢し」とあるように、析安城付近においては西夏の実効支配があまり及んでいなかったようである。以上の状況を総合すると、当時の青海南部のチベット系諸部族に対する西夏・金朝の支配は徹底したのではなく、彼らがどの国に帰属するかという問題はかなり曖昧なものであったとみられる。こうした帰属関係の曖昧な青海南部のチベット系諸部族を西夏・南宋が挾撃することによって服属させることができれば、西夏・南宋間の交通は容易となるはずである。あくまで推測の域を出ないが、金朝から独立を認められず、朝貢貿易が行えない任得敬にとって、南宋との往来をより円滑にし、外交関係を結ぶことは貿易の面でも有益なものとなるに違いない。南宋にとつても、青海方面へ影響力を伸ばし、西夏との交通を密にすることは、宿願である華北回復を目指すために有益であつたらう。ただし、南宋側がチベット諸部族に対して具体的にどのような行動に出たのかはよくわからない。

第二期における両国間の密使往来は、第一期に比べると長期かつ頻繁に行われていたようである。この間、両国

の間に位置する金朝は通交を察知すると国境付近の警備を強化したり、南宋側に詰問したりしていた。西夏と南宋の通交は金朝に警戒心を与え、さらには宋金関係にも波紋を広げていたのである。しかし、乾道六年八月に任得敬が誅殺されたことにより、通交は再び断絶することになる。

三 西遼の金朝征討情報と南宋の対西夏同盟計画（第三期・一一八五―一一八六年）

一一八〇年代に入ると、南宋側に西夏との同盟を模索する動きが再び現れる。『宋史』卷三五・孝宗本紀三には、

（淳熙十二年四月）丙子、謀言^{スベキ}えらく、故遼國大石林牙、道を夏人に假りて以て金を伐たんとすと、密かに呉挺と留正とに詔して之を議せしむ。（中略）（淳熙十三年）夏四月辛亥、呉挺に詔して約を夏人と結ばしむ。（中華書局本、六八三・六八五頁）

とある。淳熙十二（金・大定二十五、西曆・一一八五）年、「故遼國大石林牙」すなわち遼の王族耶律大石によつてトルキスタンに建国された西夏が西夏を通過して金朝を討伐しようと計画している、との情報を受けた南宋朝廷は、四川にいる呉挺（当時、利西都統制）と留正（当時、四川制置使）に対応策を協議させ、翌年には西夏との盟約の締結に乗り出したとする。

この時期における南宋側のより詳細な動きを追う上で有益な文献が、前節でも挙げた『文忠集』である。撰者の周必大は当時、枢密使の職にあり、南宋皇帝孝宗からの御筆とそれに対する回奏、各地に発信した箭子がこの文集に収められてゐる。K. A. Wittfogel, Feng Chia-sheng の両氏は、『文忠集』所収の西遼に関する記事の一部を収集

したが、内容に関する具体的な考察は行なっていない。⁽¹⁹⁾『文忠集』には、両氏が挙げるもの以外にも関連記事があり、西夏との通交に向けた南宋側の動きをより詳細に把握することができる。そこで本節では、『文忠集』の記述から南宋側の動きを追ってみた。

『文忠集』に西遼の遠征関連の文章が現れるのは、淳熙十二年四月二十一日付けで孝宗が周必大に出した「大石契丹興兵御筆」(巻一四八・奉詔録三二)が最初である。それによると、

盱眙の報⁽²⁰⁾せる大石契丹(西遼)の兵を興こさんと欲する事を覩るに、若し無ければ則ち已^やめ、或は果たして之有らば、我に在りては安んぞ坐視するを得ん。他日我若し徑^{すみ}やかに兵を舉ぐれば、則ち誓約に違^すい、若し冀^すに因れば、則ち將た何を以て辭を為さん。卿須く深謀遠圖すべし。(清道光刊本、九葉右)

とある。冒頭部分から、西遼が金朝を征伐しようとしているとの情報は、盱眙軍(江蘇省盱眙県)からの諜報によってもたらされたことがわかる。この情報を得た孝宗は御筆を発し、周必大に対応策を諮ったのであるが、これに対し、周必大は二日後に「所急は間探^{スパイ}もて精審するに在り⁽²¹⁾」と、情報収集を最優先にすべきであると回答している。『文忠集』によると、同日、孝宗は呉挺に対し、

近ごろ邊報を得たるに、大石契丹道を夏國に假りて金人を侵犯せんとすと。未だ然否を知らず。卿間探を分遣し、斥候を明らかにして、以て其の實を^{うかが}調い、若し所傳虚誕ならば、切に妄動すべからず、果たして或は之有らば、機會は失すべからざるに似たり。宜しく文武兼備の人を遣わして之と會議せしむべし、常材庶使の一

見をして信服せしむる母かれ。事^な濟す有るべきなれども、然れども此れ皆な傳聞なり。卿更に事宜を審察し、
 詳密なるを貴び、以て朕が懷^{おもひ}に副⁽²²⁾え。

と、情報収集と善後策の検討を指示する御筆を出している。その結果、この年の夏ごろ、周必大が治福州の趙汝愚に宛てた笥子では、「日來蜀中復た云えらく、爾れ大抵皆な虚誕不根なり」と記しており、四川からは虚報であろうとの報告が周必大のもとにもたらされたものと見られる。

ところで、南宋が得た西遼関連の情報は本当に虚報であったのだろうか。蔡・唐の両氏は、西遼の金朝遠征の動きがこのころ実際にあったものと考えている。⁽²⁴⁾ 両氏が論拠としているのは『金史』巻五〇・食貨志五・榷場の条にある次の記事である。

(大定)十七(南宋・淳熙四、西曆・一一七七)年二月、上(世宗)宰臣に謂いて曰く「宋人、生事背盟を喜び、或は大石と交通せんとすれば、生靈を枉害するを恐れ、備えざるべからず。其れ陝西の沿邊の榷場止だに一處のみを留め、餘悉く之を罷め、所司をして姦細を嚴察せしむべし」と。(中華書局本、一一一四頁)

右の記述は、金朝が南宋向けの榷場を、南宋と西遼との通交を理由に削減したことを伝えている。金朝が西遼の動きを警戒していたことは確認できるが、この記事は大定十七年のものであり、時期があまりにも離れ過ぎている。また、淳熙十二〜十三(金・大定二十五〜二十六)年に西夏軍あるいは西遼軍が金朝を攻撃した、あるいは攻撃を計画しているという記述はほかに見当たらない。よって、遠征計画は実際に存在していなかったと見るべきである。

う。

さて、前掲『宋史』孝宗本紀の記述によれば、このあと翌淳熙十三年四月辛亥（四日）に西夏との同盟に関する詔が発せられたとする。淳熙十二年秋以降、金朝をめぐる話題は『文忠集』でも一旦見られなくなるのであるが、ここで突如として西夏との同盟の動きが現れたのである。『文忠集』巻一四九・奉詔録四には、この年四月六日付けの「結約夏國御筆」と、周必大の回奏が残されている。まず孝宗の御筆には、「親書專人もて吳挺に付し、人を使して夏國と約を結ばしめんと欲す。若し大石契丹の彼（西夏）の界を過ぎて陝西に至るを放すを肯ずれば、他時の策もて夏帝が爲に彼此敵國禮を用いるを許さん」（清道光刊本、十二葉右）と、もし西夏が西遼に金朝遠征のための道を貸すならば、西夏に対し敵國礼すなわち対等外交を許して同盟を結ぶとしている。これに対する周必大の回奏は、

但だ以^{おも}うに夏人は戎狄の性にして、自来翻覆す。乾道中、王炎嘗て任令公（得敬）の帛書を用て通好せんとするも、ただち隨^{ただち}即^ちに密かに金虜に送るに因りて、范成大奉使の日、雍（世宗）遂に出だして以て之を示す。其れ保し難きこと此くのごとくなれば、約を結ぶこと未だ輕^{かろがる}しくすべからざるに似たり。若し雍（金朝の世宗）易世すれば、親は離れ衆は叛き、天聖明（孝宗）を相^{たす}け、決^{かたまる}ず機會有らん。（清道光刊本、十三葉右）

とあり、西夏との同盟に難色を示している。周必大はその理由の一つとして、第二期に任得敬と四川宣撫司との間で交わされた密使事件を挙げている。蔡・唐の両氏はこの記事をもとに、南宋側は西夏に対する不信任があったため同盟に踏み切らなかつたとの見解を示している。⁽²⁵⁾周必大が西夏に対する不信任を抱いていたのは右の記述から確かであるが、この回奏では、金朝皇帝が交代すれば金朝を攻略する好機があるだろうとも述べている。金朝との戦

争は時期尚早であるという、周必大の現状分析があつたこともこの記述からうかがえよう。『宋史』夏国伝はこの時の同盟計画に関する議論や西夏側の反応について、「當時の論議の可否、及び夏人の從違、史皆な書を失う」（中華書局本、一四〇二六頁）としているが、枢密使の周必大が同盟に反対であつたことは明らかである。

淳熙十一年から十三年にかけての南宋には、先に挙げた西遼の金朝攻撃計画の報のほか、「西夏頗る邊を擾す」（『文忠集』卷一九六・筈子八・「荆鄂郭都統臬 淳熙十一年」。清道光刊本、十六葉右）、あるいは「虜中忽魯大王、上京を占據す」（『文忠集附録』卷二・行狀。清道光刊本、十五葉左）といった、金朝をめぐる不穏な情報が続々ともたらされている。実際の金朝国内ではこのような事件は起きていないのであるが、筆者は、こうした情報もたらされた背景には、金朝皇帝の長期巡幸と関連があるのではないかと考える。淳熙十一（金・大定二十四）年二月、金朝の世宗は一切の政務を皇太子に任せ、祖宗の地上京へ巡幸することを決定し、翌年九月まで中都を留守にしていた。⁽²⁶⁾金朝皇帝の長期巡幸という事態にあつて、様々な憶測・情報が南宋にもたらされたのであろう。華北回復を目指す孝宗は、金朝皇帝巡幸を好機ととらえ、淳熙十一年三月には辺境の諸將に金朝との開戦に備えるよう命じている。⁽²⁷⁾しかしながら、枢密使の周必大はあくまで慎重を期し、結局南宋は金朝との開戦には踏み切らなかつた。西夏との同盟も、蔡・唐の両氏が指摘するように実現には至らなかつたとみられるが、孝宗が金朝打倒を南宋単独での軍事行動ではなく、西夏や西遼との同盟によつて達成しようとしていたことは認められよう。

おわりに

本稿では、十二世紀後半に国境を接していない西夏と南宋との間で行われた通交について、事実関係を整理し、

通交の背景を考えてきた。第一期・第三期の通交は南宋側が主導し、いずれも金朝の西辺を南北から挟撃・牽制することを目的としていた。南宋は金朝と講和を結んだものの、華北を回復する願望を捨てたわけではなかった。だが南宋は、自国のみの実力で金朝を華北から逐うことは困難であり、他国との提携を模索した。十三世紀に南宋が金朝を攻撃する際の提携相手はモンゴル帝国であったが、十二世紀後半においてその提携相手として期待したのは金朝の西北辺にあつたかつての宿敵西夏であった。これに対し、第二期の通交は自立を図る西夏の宰相任得敬が金朝との交渉に行き詰まった末に南宋と接触するのが目的と見られ、南宋領への交通路にあたる青海南部の経営を推し進めようとしていた。

金朝は華北を抑えたとはいえ、その西辺にあたる隴西地方は、北の西夏、南の南宋に挟まれる形になっていた。海陵王の南宋遠征時には、隴西地方は西夏・南宋両軍の挟撃を受けることになり、西夏軍の動向がこの地方の戦局に少なからぬ影響を与えていた。ために金朝は両国の提携に注意を払うようになったのである。このように、西夏と南宋との通交は、間に挟まれていた金朝を牽制する役割を担っていた。そして西夏の存在は宋金関係にも少なからぬ影響を与えていたのである。

西夏側の外交に関する文献が無いように、対外政策を決定する要因となるであろう西夏国内の情勢の解明もまたあまり進んでいない。しかし、十二世紀後半の西夏が、南宋や金朝などの文物を盛んに取り入れ、繁栄をみせていたことは、カラホト出土文献に残された大量の漢籍およびその西夏語訳の存在が物語っており、この時代の西夏の国力が十二世紀前半以前に劣らぬものであったこと、すなわち、西夏が中国情勢に影響を及ぼし得る力をなお有していたことは容易に想像できる。十二世紀後半の中国情勢は金朝・南宋の二大勢力の対立が重視されがちであるが、

註

- (1) 「中嶋一九八八」四二三頁参照。
- (2) 西夏と南宋の通交を扱った専論は、E. И. Кычанов, *Очерк истории маньчжурского государства*, Москва, 1968, стр. 247-249 や「蔡・唐一九九二」があるが、いずれも清朝考証学者の記述を史料として扱う箇所があり、年代比定や史料の解釈にも問題がある。その後西夏の対外関係史を扱った杜建録『西夏与周边民族關係史』（甘肅人民出版社、一九九五年）や李華瑞『宋夏關係史』（河北人民出版社、一九九八年）が刊行されているが、西夏—南宋關係史に関しては Кычанов 氏や蔡・唐両氏の論考を超えていない。
- (3) 海陵王の南宋遠征の経過については、『金史』卷五・海陵本紀、及び外山軍治『金朝史研究』（東洋史研究会、一九六四年）三九—四八頁参照。また、隴西方面の南宋軍の動向については、王智勇『南宋吳氏家族的興亡』（巴蜀書社、一九九五年）一四一—一六三頁、楊倩描『吳家將—吳玠吳玠吳玠吳玠合伝』（河北大学出版社、一九九六年）一四一—一八六頁参照。
- (4) 『三朝北盟會編』卷二二二・紹興三十一年十月の条（上海古籍出版社本、一六七一一—一六七二頁）
- (5) 『三朝北盟會編』卷二二三・紹興三十一年十二月八日の条（上海古籍出版社本、一六七八—一六七九頁）
- (6) 『宋史』卷八七・地理志三・会州の条（中華書局本、二二五九頁）
- (7) 『金史』西夏伝（中華書局本、二八六八頁）。なお『金史』卷六一・交聘表中によると、この年の十二月辛未に「兵もて宋の侵地を復さんことを乞う」とある（中華書局本、一四一八頁）。
- (8) 王十朋撰『梅溪王先生文集』奏議卷二・「論史浩劄子」（四部叢刊本、三二二頁）
- (9) 『宋史』孝宗本紀によると、虞允文が四川宣撫使に任じられたのは乾道三年六月甲戌である（中華書局本、六四〇頁）。乾道五年三月乙亥には虞允文を臨安へ戻し、代わって王炎を四川宣撫使とした（同、六四五頁）。王炎は乾道八年九月まで四川宣撫使の職にあり、後任には再び虞允文が就いている（同、六五四頁）。

- (10) 『金史』卷六一・交聘表中・大定十年九月丙戌(九日)の条(中華書局本、一四二七頁)
- (11) 『文忠集』卷六二・平園續稿卷二・「資政殿大學士贈銀青光祿大夫范公成大神道碑慶元元年」。なお、『文忠集』には、四庫全書本のほか複数の版本が知られているが、筆者は清道光二十八年歐陽棨刊本を底本とし、静嘉堂文庫所蔵の宋刊本(完存せず)と四庫全書本を適宜参照した。
- (12) 『金史』卷六一・交聘表中・大定十年の条(中華書局本、一四二七―一四二八頁)
- 七月庚子、宋人以蠟丸書遣任得敬、夏執其人并書以來。
- (13) 『金史』卷一三四・西夏伝(中華書局本、二八七〇頁)
- 八月晦、仁孝誅得敬及其黨與、上表謝、并以所執宋人及蠟丸書來上。
- (14) 『金史』卷一三四・西夏伝には、「夏國に相たること二十餘年、陰かに異志を蓄え、夏國を圖らんと欲し、宗親大臣を誣殺し、其の勢漸く逼れば、仁孝(西夏皇帝)制する能わず」(中華書局本、二八六九頁)とある。西夏では宰相を「中書令」と呼び、西夏語では漢語「中書令」の音写で表現する。南宋側の文献では任得敬を「任令公(令公は中書令の尊称)」と表現することがあるが、これは彼が中書令であったことを示す証左となろう。
- (15) 『金史』卷一三四・西夏伝(中華書局本、二八六九頁)。また『金史』卷六一・交聘表中・大定八年の条に、「四月戊午(二十七日)、夏任德聰を謝恩使に遣わすも、詔して其の禮物を却く」(中華書局本、一四二五頁)とあり、西夏伝の記述に対応する。
- (16) 西夏の朝貢使節による金朝での貿易活動については「閏一九九六」二〇―二四頁参照。また西夏にとって、金朝への朝貢使節の派遣は、皇帝だけでなく、使節團として派遣される臣僚にも貿易の利益を得る機会となっていた。それは、西夏の法典の規定からも窺える。佐藤貴保「西夏法典貿易関連条文訳註」(シルクロードと世界史)大阪大学大学院文学研究科、二〇〇三年、一九七―二五五頁)参照。
- (17) 吐谷渾と南朝との通交、及び交通路については「松田一九八七」一一五―一二三頁、和田博徳「吐谷渾と南北両朝との関係について」(『史学』二五―二、一九五一年、八〇―一〇四頁)参照。
- (18) 北宋期における四川―青海間の茶馬貿易については、曾我部静雄「宋代の馬政」(『東北大学文学部研究年報』一

○、一九六〇年、三四〇―九二頁)、梅原郁「青唐の馬と四川の茶―北宋時代四川茶法の展開―」(『東方学報(京都)』四五、一九七三年、一九五―二四四頁)等の研究がある。洮州の榷場については、『金史』卷五〇・食貨志五・榷場の条(中華書局本、一一一三―一一一四頁)参照。なお、洮州の榷場が「西羌」向けにも開かれていた可能性は加藤繁氏が既に指摘している。[加藤一九五二]二四七―二八三頁参照。

(19) K. A. Wittfogel & Feng Chia-sheng, *History of Chinese Society Liao* (907-1125), New York, 1949, pp. 647-648.

(20) 『文忠集』の清道光刊本や宋刊本の「大石」の字は、四庫全書本ではすべて「達實」に書き換えられている。

(21) 『文忠集』卷一四八・奉詔録三・「繳二十一日御筆奏 四月二十三日」(清道光刊本、九葉左)

(22) 『文忠集』卷一四八・奉詔録三・「宣示付吳挺御筆 同日」(清道光刊本、九葉左―十葉右)。『文忠集』は、直後に留正への御筆(「宣示付留正御筆」)が収録されており、「吳」挺と密に評處を議「すよう指示している。

(23) 『文忠集』卷一九一・筍子三・「趙子直丞相(第十二首)」(清道光刊本、十六葉左)。この筍子の冒頭には、「地震閩浙・江西皆同日」という文言がある。『宋史』卷三五・孝宗本紀三によると、淳熙十二年五月庚寅と翌辛卯の日に地震があったとしている(中華書局本、六八三頁。辛卯日の地震は福州で発生)。よってこの筍子は淳熙十二年五月以降に書かれたものとみられる。

(24) 「蔡・唐一九九二」七八頁参照。

(25) 「蔡・唐一九九二」七八頁参照。

(26) 以上の金朝国内の情勢については、『金史』卷八・世宗本紀下による。

(27) 『宋史』卷三五・孝宗本紀三・淳熙十一年三月の条(中華書局本、六八一頁)

癸巳(四日)、利路三都統制吳挺・郭鈞・彭杲に命じて密かに出師進取の利害を陳べしめ、以て金人に備えしむ。

参考文献

加藤 繁 一九三七 「宋と金国との貿易に就いて」加藤一九五二、二四七―二八三頁(初出『史学雑誌』四八一―二)。

- 一九五二 『支那經濟史考証』下、東洋文庫。
- 蔡東洲・唐祿祥 一九九二 「論南宋同西夏の關係」『四川師範學院學報（社會科學版）』一九九二年第二期、七五～八〇、六六頁。
- 中嶋 敏 一九三六 「西夏に於ける政局の推移と文化」中嶋一九八八、三九九～四二三頁（初出『東方學報（東京）』六）。
- 一九八八 『東洋史學論集—宋代史研究とその周辺』汲古書院。
- 関 丙勲 一九九六 「西夏・金の 交聘關係에 對하여」『中央아시아研究』一、九～三五頁。
- 松田壽男 一九三七 「吐谷渾遣使考」松田一九八七、六八～二二六頁（初出『史學雜誌』四八—一一・一二）。
- 一九八七 『松田壽男著作集』第四卷、六興出版。

（文學研究科特任研究員）

SUMMARY

**The Relations between Tangut and the Southern Song Dynasty
in the Second Half of the 12th Century**

Takayasu SATO

When the Jin 金 dynasty occupied the northern part of China in the second half of the 12th century, the Southern Song 南宋 dynasty had not adjoined Tangut (Xi Xia 西夏) which occupied the northeast of China. But in this period, these two countries sent messengers each other. This article confirms these facts, and discusses the background of their relations.

The Southern Song dynasty wanted to the northern part of China back. But it was so hard that the Southern Song dynasty could not carry it out by herself. So the Southern Song dynasty sent messengers to Tangut, tried to get Tangut as an ally for attack the Jin dynasty on both sides.

From the Tangut's side, the Tangut minister Ren De-jing 任得敬 often sent messengers to the Southern Song dynasty, in order to gain assistant from the Southern Song to attack the Tibetan tribes who lived in the southern Qinghai 青海 district.

Tangut and the Southern Song armies had attacked the Jin army at the same time, and temporarily occupied the Longxi 隴西 district which was Jin territory. The two countries suppressed the Jin dynasty. As a result, the Jin dynasty was careful with the communication with the two countries. It can be said that Tangut affected the Chinese political situation.

キーワード：西夏，南宋，金朝，青海，隴西